

Title	会話分析から見た冠詞と指示対象
Author	福島, 祥行
Citation	人文研究. 51 卷 7 号, p.23-46.
Issue Date	1999-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	左近毅教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部 紀要
第51巻 第7分冊 1999年23頁～46頁

会話分析から見た冠詞と指示対象

福島 祥行

0. 冠詞と指示

冠詞の機能について、所謂「新情報／旧情報」と見る立場からは、un Nは「談話裡への新要素の導入」、le Nは「談話裡における既導入要素への照応」と説かれる。

- (1) La première était habitée par un roi. Le roi siégeait, habillé de pourpre et d'hermine, sur un trône très simple et cependant majestueux. (*Le Petit Prince*)
- (2) — Mais j'ai déjà vu un roi qui...
— Les rois ne possèdent pas. Ils 《règnent》 sur. (*Le Petit Prince*)

(1)におけるle roiはun roiによって談話裡に導入された要素Xを指示・同定しており、この場合のleは「特定の定冠詞」ということになる。一方、(2)におけるles roisは、直前の言表に出ているun roiの複数形ではなく、言語外の談話資源である一般知識としてのroiを表しているのであり、このlesは「総称的定冠詞」となる。

しかしながら、この「総称的定冠詞名詞句」の指示対象が何であるかということにかんしては、些かの議論がある。それはいったい「内包」なのか、「役割」なのか、それとも「概念」なのか。それにたいし、「特定の定冠詞名詞句」の指示対象はいかにも明らかなように思われる。だが、後者の指示対象は、本当に談話裡の要素なのであろうか。それは「外延」なのか、「値」なのか、それとも「実在物」なのか。そもそも、冠詞の《指示》とはどういうものであるのか。

ところで、情報構造とは、云うまでもなく「話し手－聞き手」間に成り立つものである。したがって、冠詞そのものの機能を問う理論的研究は、文レ

ヴェルでの研究、さらには談話レベルでの研究へと対象範囲を拡大してきた。しかしながら、談話レベルでの分析を行なうためには、言語表現のみではなく、非言語表現も視野に納めねばならない。そのためには、生の^{なま}会話をそのシチュエーションごと分析することも肝要であろう。また、実際の会話に現れる「云いよどみ」「オーヴァーラップ」「繰り返し」「云い直し」などの、一般には「非正規的」とされる要素も、談話の流れという点からは軽んじられぬはずである。

そこで、この小論では、ビデオを基にした現代フランス語の会話コーパスに現れる有冠詞名詞句を検討し、以て、冠詞をめぐる議論にささやかなる考察を加えてみたい。

1. コーパス

コーパスには、手元にあったアイオワ大学作成のフランス語学習用教材ビデオを用いた。どちらも1分から2分程度のものである。以下にコーパスの概要を示す。

コーパスAは、フランスの朝のテレビ番組の色々なコーナーを編集したビデオから、1コーナーを取り上げたものである²。したがって、簡単な台本があると考えられるが、実際に行なわれている会話のほとんどは自由発話と思われる。

コーパスBもフランスのテレビ番組を収録したビデオからの、1シーンである。こちらはカメラ・ショットの切り替えなどがあり、コーパスAに較べると番組としての「作為」が目立つが、「相づち」や「視線」といった非言語的要素および他のシーンをチェックした結果、おおむね自由発話であると判断した。

なお、いずれのビデオも、アップの場面などで、登場人物の顔が写っていない場面があり、視線の確定が出来ない部分があった。

また、スクリプトは教材に附属していたものを基に筆者が作成した。勿論、エスノメソドロジー風のトランスクリプト用記号は、筆者の付け加えたものである。記号の示すところは以下の通り。

= 直前／直後の文に密接して発話されていることを示す

... ポーズ

「 次の行の「以下と発話や動作が同時であることを示す

[?] 聞き取り不能箇所

／ 目立つ上昇調イントネーション

＼ 目立つ下降調イントネーション

Hmm 相づち

ヴィルギュル(,)は文の構造を判りやすくするために書き入れたものであり、実際の発話では、そこにポーズは置かれない。行頭の番号は、便宜上付したスクリプトごとの通し番号である。

2. 分析

2-1. マーカーとしての冠詞

言語学的会話分析にとって、会話に現れる諸要素は、何らかの言語的操作のマーカーであると看做される。坂原(1996)は、英語の名詞句について検討し、不定冠詞・定冠詞・指示形容詞・所有形容詞の意味として、次のようなまとめを行なっている。

- (3) a. 不定冠詞句 a N : 談話記憶にNである新しい要素を導入せよ。
- b. 定冠詞句 the N : 談話資源内のNである要素を同定せよ。
- c. 指示形容詞句 this/that N : this/thatの領域にあるNである要素を同定せよ。
- d. 所有形容詞句his N : heと関連するNである要素を同定せよ。

この考察は、基本的にフランス語にも妥当すると思われる。しかし、「談話」にかんしても何らかの定義が必要である。東郷(1998b)は、「談話」にたいし、以下のような定義を与えている。

- (4) a. 話し手と聞き手のあいだの共同作業によって
- b. 時系列に沿って
- c. 局所的に構築される心的対象である。

ひとまず、これらの観点に沿って、実際の会話コーパスに現れた有冠詞名詞句に検討を加えてゆくことにする。

2-2. 繰り返されるun N

不定冠詞は新規談話要素を導入したというマーカーである。したがって、同一名詞句は、一つの談話裡に通常一回しか現れない。だが、次の例では同一不定冠詞名詞句が連続する発話で繰り返されている。

(5) 【コーパスA】

1. L : (咳) Bonjour Sophie

2. S: (近付いて来つつ) Alors ce matin =
3. L: = (Sを見て) Je suis en train de me battre avec un bouton et une allumette.
4. S: Voilà. Parce 「qu'alors Laura, (Lの隣に坐って) 「elle coud
5. L: 「(カメラを見る) 「(Sを見る)
6. S: 「son bouton (Lの手元を見て)
7. L: 「(カメラを見る)
8. S: avec une (Lの顔を見る) allumette. =
9. L: = Et en fait c'est pas moi qui coude ce, mon bouton avec une allumette, c'est une amie 「qui a l'habitude
10. S: 「Votre grand-mère

3行目の二つのun Nは、いずれも新規導入要素である。しかしながら、後者のallumetteについては、続く8行目の、話し手にまわったSもまた「新規」に導入しており、さらに9行目でLは再び「新規」に導入している。これはどういうことであろうか。

一つの解釈は、「談話空間」もしくは「スペース」³ がそのつど更新され、前に導入された情報がキャンセルされてしまっているというものである⁴。たしかにSは、Lを三人称におくことおよびカメラに向かって喋ることで、視聴者に向かって報告する立場をとっており、またLも「自分」について言及することで、視点の変更が行なわれたようにも見える。すなわち、8行目では「S-視聴者」談話空間が開かれ、9行目では新たな「L-S」談話空間が開かれているという考え方である。

だがSは、もう一つのun NであるboutonにLを示す所有形容詞を付し、かつLの手元に視線を向けることにより、Lの談話世界を引き継いでいることを示している。また、この発話は「理由」を述べる文になっており、視聴者も亦、前の談話空間裡に存在していたということが前提となっている。Lの方も指示形容詞を所有形容詞に訂正することで前の発話との連続性を示しているように思われる。

また、相互行為分析の立場からは、「話し手-聞き手」構成が成立していないと看做される場合、話し手は繰り返しや云いよどみを行なうという(西阪 1996)。すなわち、話し手が談話空間は不成立であると判断した場合、成立へ向けてのリトライが行なわれ得るわけである。この場合、「新規導入情

報」の繰り返しが予想される。勿論、割り込みなどによる不成立の場合も同様である。たとえば、(6)の1行目と5行目がその例に当たる。

(6) 【コーパスA】

1. L : = Et en fait c'est pas moi qui couds ce, mon bouton avec une allumette, c'est une amie 「qui a l'habitude
2. S : 「Votre grand-mère
3. L : Non non
4. S : Ah
5. L : Ça c'est une amie qui a, de surcroît n'est pas (Sを見て) une vieille dame (笑) .. (正面を向き) m'a donne ce truc pour coudre les boutons.

たしかに(5)の4～8行目の部分ではLがSから視線を逸らしており、「不成立」の条件を備えている。しかしながら、云いよどみは現れていないし、そもそもSはLに向かって発話していない。よって、「繰り返し」ではないことも明らかである。

かくして、この一連の発話の談話空間に断絶はないと考えられる。では、この「新規導入」は如何に解釈されるべきであろうか。最初に現れる3行目の場合、Lの手元には最初からボタンもマッチ棒も存在しているので、Sは(当然、視聴者も)、当該事物の存在自体をすでに認知しているはずである。にも拘らず不定冠詞を付すのは、そもそも「新規導入」ということが、「言葉として」名指すことにより当該事物に注意を惹きつけ、ボタンとマッチ棒の「存在情報」を話し手-聞き手間の、謂わば「心的空間=認知エリア」に書き込むことに他ならないからであろう。この点において、un Nはたしかに「新規導入」のマーカ-と成っている。だが、すでに書き込み済みである8行目、9行目においてマッチ棒がun Nのままであるのは、これらのun Nが「新規導入」ではないことを示唆する。事実、次のような談話では、発話者Bの発話におけるNの認識構造段階、すなわち認識上のステータスは、発話者Aのそれと変わっておらず⁵、ただちに元のun Nが復元可能な状態に置かれている。

(7) A : Tu as une voiture ?

B : Oui, j'en ai une.

つまり、un Nの第一義は「新規導入」ではないわけである。さらに厳密に云うならば、「新規導入」とは、un Nの機能の特定の文脈における発現形

に他ならず、より一般的な特徴としては、別のタームを用いるべきだということである。では、より一般的なun Nの特徴とは何か。ここにおいて、un Nにかんして云われるもう一つの機能、すなわち「存在確認」の面が浮上してくる。

「存在表示構文」(il y a, voilàなど)との親和性の高さからも判るように、un Nは「Nというモノ・コトが存在する」ということを言語の形で表していると考えられる(cf. 福島1990, 1991, 1993)。そしてこのことは、「Nというモノ・コトに注目せよ」という話し手の意識の現れと云い得⁶、それが「談話裡に新規導入ゆえ注目してほしい要素」に付されるのは当然といえよう。

それでは(5)の8行目・9行目におけるun Nは「存在注目」なのであろうか。たしかに8行目では、une allumetteのところでは話し手が「聞き手の顔を見る」という行為により、allumetteという「存在」を際立たせているように見え、それはun Nの機能のジェスチャー面での現れのように思える。このun Nの発話と同時に「聞き手を見る」という行為は、次の箇所にも現れている。

(8) 【コーパスA】

1. S: (乗り出して) = Mais je suis rassurée parce que (ペンでLの手元の針をさし) j'aperçois quand même une (Lの顔を見る) aiguille. = (カメラ目線に戻る)

(9) 【コーパスA】

1. S: Merci Laura pour ce truc absolument indispensable. (Lの手元を見つつ) 「Ça me paraît très bien. (自分の手元の進行表をめくってみる)
2. L: 「Et il paraît ... mais il paraît que toutes les couturières font ça avec (Sを見る) une allumette. Voilà. (笑)

ここでもそれぞれの話し手は、un Nの「存在」を強調しているように見える。

しかしながら(5)の9行目では、話し手は、ことさらune allumetteを際立たせる必要はないように感じられるし、ジェスチャー面でも何の動きも行っていない。また、筆者の尋ねたインフォーマントも、このun Nはle Nに交替可能であると指摘している。では何ゆえのun Nなのか。

同じインフォーマントは、この9行目のun Nはle Nに交替可能であるが、自分としては直感的にun Nの方を好む、とも述べている。このことは、このような文脈においては、un Nの方が相応しいものとして要請されることを示していよう。それは如何なる文脈か。ここで、前置詞avecの後の可算名詞句はun Nという形で共起しやすいのではないかということが考えられる⁷。しかしながら、同じコーパスの少し後には、avec + le Nの形が現れる。

(10) 【コーパスA】

1. S: (乗り出して) = Mais je suis rassurée parce que (ペンでLの手元の針をさし) j'aperçois quand même une (Lの顔を見る) aiguille. = (カメラ目線)
2. L: = Il 「y a quand même, il y a quand même ... attendez.
3. S: 「Ça ne veut pas dire que vous ... vous cousez avec l'allumette.
4. L: L'allumette 「n'est pas faite pour coudre directement
5. S: 「(笑)
6. L: 「le bouton
7. S: 「Ah, d'accord. D'accord.

それでは、再び、(5)の9行目におけるallumetteをun Nたらしめる文脈とは、一体何なのであろうか。

c'est ... quiの構文から容易に判別できるように、この発話はqui以下が、謂わば「旧情報」である。そして、ceと云いかけて所有形容詞に訂正したことから明らかなように、qui以下は8行目の最後の部分をコピーしている⁸。つまり、このcouds mon bouton avec une allumetteという表現全体が一種の「疑似動詞句」(quasi-syntagme verbal)として働いており、une allumetteはその中の一部として繰り返されているだけなのだと言えよう。その点において、このun Nは「非指示的」なのである⁹。そしてこのことは、次の例に見るようなun Nの用法と関連しているのではなかろうか。

(11) VLADIMIR (*froissé, froidement*). — Peut-on savoir où Monsieur a passé la nuit ?

ESTRAGON. — Dans un fossé.

VLADIMIR (*épaté*). — Un fossé ! Où ça ? (*En attendant Godot*)

この(11)におけるun Nは驚きによる繰り返しであるが、ここでヴラジミールは、エストラゴンによって談話に導入された「溝」の具体的指示対象にで

はなく、「溝というもの」すなわち「溝」という《概念》に、さらに厳密に云えば <<fossé>> という《名称》そのものにたいして驚いている。この un N も「非指示的」であり、謂わば《名称》を取り立てる働きをしている。

これらのことを勘案すると、un N が「新規導入」するのは指示対象ではなく「N という名称」なのであり、それが「結果的に」N と名指される指示対象 X の存在を保証することになっていると考えられる。当然、談話裡にすでに導入済みの要素であっても、un N で指し直すことが可能である。

- (12) Tu vois bien... ce n'est pas un mouton, c'est un bélier. Il a des cornes... (Le Petit Prince)

《名称》を与えるということは、直ちにカテゴリーを与えるということに繋がる。すなわち、un N とは、N というカテゴリー化を行なったという印でもある。この例に見られるような C'est un N. という形式は、通常「同定表現」とされる。しかし、この「同定」ということは、「名指す」ことに他ならない。

(13) 【コーパス B】

1. A : (店に這入って) Bonjour, Madame.
2. B : Bonjour.
3. A : (棚の楽器を指さし) Je voudrais voir ça, s'il vous plaît.
4. B : Oui. (持っていた楽器を置き、示された楽器を出す) Vous savez ce que c'est ?
5. A : Non.
6. B : (Aに) Oui, c'est une vielle à roue. C'est un instrument du centre de la France. /
7. A : Hmm.

un N の対象である楽器はすでに両者の前に存在しており、B はそれに対して「名指し」を行なう。一つ目の un N はまさしく「名称の表示」であり、一種の「新規命名」である。しかしながら、二つ目の un N において instrument は、おそらく A にとって「新規命名」ではない。たしかに「円盤付きヴィエル」は些か風変わりな恰好をしてはいるものの、「楽器」の既成概念を超えるほどには珍妙ではないからである。勿論ここでの情報の焦点は「フランス中部の」にある。つまり、この un N は「フランス中部の楽器」というカテゴリー化を行なっているわけであり、この場合の N は instrument du centre de la France 全体であると考えても良かろう。

以上の点から見直すと、「存在確認」のun Nも「存在」の強調ではなく、「名称」を「与える／確認する」ことによる「名称強調」だということができよう。そして「名称強調」は、その《名称》から検索される《概念》の強調に繋がり、結果的に「Nというモノ・コト」を際立たせることになっているのである¹⁰。

さらにここで、談話における「繰り返し」について些かのコメントを付すならば、これは表現の共有を話し手＝聞き手が確認する一種の「交感」表現であり(cf. 串田 1997b), (5)の9行目におけるun Nを含む言表の「コピー」は、共発話者(co-énonciateur)との談話の一貫性、あるいは心理的距離の近さ¹¹という談話現場の構成の中から自ずと生じてきたものと解釈することができよう。そしてこのことを敷衍するなら、共発話者の顔を見るという行為は、相手にたいする「共有」の確認であり、「同意」を求める心の動きの現れであるゆえ、「名称確認」のun Nにおいて「繰り返し」のun Nが多いのも当然であるという説明が可能となる。

いずれにせよ、un Nの繰り返しという現象は、単なる「新情報の伝達」という考えでは説明しがたいものなのである。

2-3. 《特定》的定冠詞

所謂「照応的」定冠詞名詞句は、談話裡に先行詞を持つとされる。一方「非照応的」なものは、談話に関与的なスキーマの枠によって、指示対象の同定が可能になるとされる。

(14) 【コーパスB】

1. B: Non. Le principe, (蓋を開けて示しながら) ce sont des cordes qui passent sur une roue.
2. A: Hmm.
3. B: Voilà. On tourne la roue...
4. A: Hmm.

(15) 【コーパスB】

1. B: Si vous voulez, je peux vous montrer un instrument qui est en restauration dans l'atelier.
2. C: (項突く)
3. A: Oui.

ここで(14)の3行目のla roueは、言語レベルでも導入済みの要素であり、

かつ、眼前に実在してもいるから、Aにとって同定は容易に可能であろう。これは所謂「現場指示的」である。一方、(15)の1行目のl'atelierは、店の奥にあるらしいことは判るが、眼前にはなく、またそれまでに言語レベルでも導入されていない。しかしながら、「楽器店」という文脈であれば、その店の工房であることは容易に推定でき、同定も可能であり、「準現場指示的」とでもいうべき、「文脈指示」の一種と云い得る。

だが、次の例はどうであろうか。

(16) 【コーパスA】

1. L: L'allumette 「n'est pas faite pour coudre directement
2. S: 「(笑)
3. L: 「le bouton.
4. S: 「Ah, d'accord. D'accord.
5. L: (カメラ目線) Elle me sert simplement, parce que toutes les bonnes couturières le savent, il faut laisser (Sを見て) un petit peu de jeu entre (指さし) le bouton et le tissu, parce que si vous ne laissez pas de 「jeu,
6. S: 「Hmm.
7. L: (ボタンを引っ張る仕草) vous arrachez le tissu. (ボタンを見て, マッチ棒を摘み) Donc, le truc est tout bête, vous glissez une allumette entre le bouton et le tissu.
8. S: Hmm.
9. L: Voilà. (針を引っ張りつつ) Et au lieu de coudre directement, d'abord deux petits points pour fixer le bouton, (ボタンの下に針を差し込みつつ) et ensuite vous mettez simplement votre fil autour de l'allumette et vous (再び針を差し込みつつ) 「repasser dans le bouton ...
10. S: 「Donc vous cousez l'allumette avec. =
11. L: = Voilà. Comme ça. (再び針をボタンの穴に通して) ...
Je repasse.

5行目では指さしを伴って、ボタンと布を指示している。これはまさに「現場指示」の状況である。しかしながら、発話全体は「良い仕立屋さんならみんな知っている」内容であり、一種の「格言」にも似た「総称文」となっている。これはつまり、この5行目のle boutonとle tissuが対象を眼前にし

た「指示的」発話でありながらも、実は「非指示的」であることを示しているよう。

9行目も同様で、ここでは、実際にマッチ棒ごとボタンを縫いつけながらも、視聴者にたいして「糸をマッチの回りに」¹²と語っており、このl'allumetteとle boutonが、「このマッチ」「このボタン」という「現場指示」ではなく、「マッチ (一般)」「ボタン (一般)」として用いられているということの証拠となっている¹³。

かくして、一見「現場指示的」と見えるle Nの中に、実は「非現場指示的」なものの存在することが明らかになる。これは要するに、le Nの指示は言語レベルのものであり¹⁴、指示対象は間接的にしか指され得ないことに由来している。この観点に立てば、(14)(15)における「現場指示性」の明らかと看られるle Nでさえも、「非指示的」である可能性は排除しきれないのである¹⁵。

このことは、「特定の」とされるle Nの多くが、実は「非特定の」であることを意味する。そもそも「特定の」とは如何なることであろうか。通常これは、「外延指示」というように、Nというカテゴリーのとあるメンバーを指すとされる。典型的には(1)の例におけるようなもので、「ソノN」訳せるようなものである。

しかしながら、(1)においてさえ、le roiの基本機能は、roiという「カテゴリー」を指すだけで、それが前文に登場するun roiと同じ指示対象を指し得るのは、単にコンテキストの支えによっているのだと考えることはできぬであろうか。つまり、un N→le Nという流れにおいてle Nは、前者からNのみを引き継いで（照応して）いるわけである。そしてこの考えは、先に見たようにun roiという名詞句も、直接に指示対象を指さず、roiという「名称の表示」を基本機能とする以上、un roi / le roiのいずれにおいても、roiという語の「意味」は、ア・プリオリに話し手の脳裡・心中に存在するのではなく、会話（この場合は「著述—読書」）という相互行為の中で、話し手—聞き手により、その場その場で作り上げられ（充当され）てゆくのだというイメージに繋がってゆくことになる¹⁶。

現状において、このような考え方が妥当であることを示すことはできないが、冠詞付き名詞句があくまでも「言語レベルの指示」を行なう以上、上のようなイメージの成立する余地も充分あることを指摘しておきたい。

さて、以上は、眼前に名指される対象が存在しながらも「非現場指示的」

な例であった。しかしながら、le NがNというカテゴリーのみを指すものであるならば、上とは逆に、眼前にないものを恰も「現場指示」のように示すことも可能ではなかろうか。

(17) 【コーパスB】

1. A : Non chez nous, il y a le .. comment il s'appelle, le oud, en arabe.
2. B : (楽器の方を向いたまま) Ah, les ouds, oui. (楽器の埃を払うように)
3. C : Le quoi ?
4. B : (Cの方を見る)
5. A : Le oud.
6. C : Le oud ?
7. A : Le oud. (右手で弦をかき鳴らす仕草)

(17)の1行目と5行目のle NにおいてAは、明らかに«oud»という「名称」を示している。しかしながら7行目では、「ウード」を知らぬCの問（でなければ確認）にたいして、oudという名称を答えつつAはある仕草をしてみせる。それは「こんな楽器だ」ということを身振りで示しているようでもあり、思わず出てしまったもののものである。いずれにせよ、ここでは、le oudという言葉と共に、Aがある「具体的イメージ」を想起していることに注目したい。これは、(16)の例などとは逆に「眼前にないものの直接指示」とでも呼び得るようなle Nである。このことは、le Nが「特定」であるか「非特定」であるかは、甚だ「その場的」であるということの証左ではなかろうか。

2-4. 《総称》的定冠詞

2-3.に見たように、le Nが基本的にNというカテゴリーのみを示すのであれば、それは常に「総称的」le Nと接近することになり、その境界は曖昧となる。だが勿論、「非特定性」をはっきり明示したle Nも存在する。

(18) 【コーパスA】

1. L : 「Il y a quand même, il y a quand même ... attendez.
2. S : 「Ça ne veut pas dire que vous ... vous cousez avec l'allumette.
3. L : L'allumette 「n'est pas faite pour coudre directement

4. S: 「(笑)
 5. L: 「le bouton.
 6. S: 「Ah, d'accord. D'accord.

3行目と5行目のle Nはそれぞれ「そのマッチ棒は……そのボタンを」と解するよりは、「マッチ棒というものは……ボタンというものを」と解すべきであろう。すなわち「総称的」le Nである。

(19) 【コーパスA】

1. L: Ca c'est une amie qui a, de surcroit n'est pas (Sを見て) une vieille dame (笑) (正面を向き) m'a donne ce truc pour coudre les boutons. (Sを見て) Moi je suis 「pas une couturière vraiment affirmée, (正面を向き) et
 2. S: 「Hmm

談話裡にボタンは登場しており、また眼前にもボタンは存在するが、複数ではない。したがって、(19)のようなles Nは「特定の」ではあり得ず、「総称的」である。このことはLの「視聴者に向かって話す=Sとの対話の場から一時離れる」(勿論、Sのことは意識しつつけているが)という態度によっても確認できる。

さて、(18)における「総称単数」のle Nは明らかに「非指示的」であり、先に見た(16)のle Nとの間に、さほどの相違は認めにくい。だが、(19)における「総称複数」のles Nは、「総称単数」のle Nに比して「具体的イメージ」を持つとされ、両者の間に相違を認めるのが普通である (cf. 朝倉 1967, 松原 1970)。そこから、les Nの方は、「外延指示」すなわち「具体的指示対象の集合を指す」とされる場合がある。この場合、les Nは限りなく tous les Nの意であるということになる。

しかしながら、les Nが限りなく tous les Nであるとしても、それが「個別の指示対象」を持つとは看做しがたい。たとえば次の例では、「全ての」と明示的に語られながらも、実際にカテゴリー内の「全良い仕立屋さん」が指示対象となっているとは考えにくい。

(20) 【コーパスA】

1. L: (カメラ目線) Elle me sert simplement, parce que toutes les bonnes couturières le savent, il faut laisser (Sを見て) un petit peu de jeu entre (指さし) le bouton

et le tissu, parce que si vous ne laissez pas de 「jeu,

2. S: 「Hmm.

3. L: (ボタンを引っ張る仕草) vous arrachez le tissu. (ボタンを見て, マッチ棒を摘み)

このtoutes les bonnes couturièresは、やはり、bonne couturièreというカテゴリーを示しているだけであって、toutesは「良い仕立屋さんなら誰だって」という一種の強調と取るのが自然であろう¹⁷。

かくして、「総称的」le(s) Nも亦、Nというカテゴリーを表示することを第一義とする点において、前節に述べたle Nと、本質的に同一のものであるということが判るのである。

3. まとめ

2において述べきたったところを纏めると、次のようになる。

- ① un Nの基本的機能は、Nというモノ・コトの《名称》によって「名指す」ことにある。結果的に、その名指されたモノ・コトの《存在》を保証する。
- ② le Nの基本的機能は、Nというモノ・コトの《名称》を持つカテゴリーを表示する。結果的に、そのカテゴリーのメンバーの《存在》を示す場合もある。

以上、会話コーパスに基づきながら、現代フランス語の冠詞付き名詞句の指示にかんして簡単な考察を行なった。文法レヴェルでの会話分析の利用にかんしては、まだまだ多くの問題を残している。また、分析に供し得る会話コーパスも数少ない現状では、コーパスの作成も重要な課題である。しかしながら、会話分析・相互行為分析の成果は、従来の「伝達」型コミュニケーション・モデル問題点を指摘しており、このことは、「意味論」は勿論のこと、「統辞論」にも大いに見直しを迫ると考えられる。少なからぬ問題を確ししつつも、さらなる考察へと向かってゆかねばならぬ所以である。

【注】

- 1 この論文の基本部分は、日本フランス語学会第181回例会において発表した内容を基にしている。その際、ご指摘・ご質問下さった坂原茂氏、川口順二氏、大久保伸子氏、長沼圭一氏、渡邊淳也氏に感謝いたしたい。
- 2 また、番組は生放送なので、出演者にとって視聴者も「リアルタイム」な存在と

して意識されやすいと思われる。

- 3 メンタル・スペース理論における「スペース」の概念にかんしては、Fauconnier (1996)参照。
- 4 談話の境界にかんしては、数々の議論がある。東郷(1999)は、「談話世界の一貫性」を構築する要因として、(1)主題の一貫性、(2)視点の一貫性、(3)時の連続性、(4)スペースの一貫性を挙げる。この観点から、次の例文を検討すると、/の箇所で談話世界が不連続になることが判る。

㉓ -Non! Non! Je ne veux pas d'un éléphant dans un boa./Un boa c'est très dangereux, et un éléphant c'est très encombrant. Chez moi c'est tout petit./J'ai besoin d'un mouton./Dessine-moi un mouton. (*Le Petit Prince*)

したがって、un Nは談話世界ごとに「新規導入」されていることになる。しかしながら、この「談話の切れ目」の判断は、実際はかなり微妙であり、ad hocになり得る危険性を常に秘めている。
- 5 認識段階が進めば、le Nの段階となり、それを受けるのは人称代名詞であって、中性代名詞ではなくなる。
- 6 夙にGuillaume (1919)はun Nにたいして「浮き彫り」(relief)効果を指摘している。
- 7 事実、Discotexteを使った調査では、avec ... allumetteについて検索された7例全てが、avec une allumetteであった。
- 8 勿論son → monという人称の転換は行なわれている。
- 9 これはつまり、メンタル・スペース理論的に云えば「役割」(rôle)、筆者の従来の論から云えば「概念」(conception)を表しているということになる (cf. 福島1998)。
- 10 勿論un Nは、「非存在」のものについても云える。

㉔ 【コーパスB】

1. B : Et puis, euh, actuellement, il y a, (手にしていた糸巻きを眺め) il lui manquait des chevilles aussi (元の場所に差し込もうとして、再び顔の前に持ってきて示し),
2. C : Hmm.
3. B : que j'ai retournées et refaites, (糸巻きを差し込む) pour pouvoir accrocher les cordes. (楽器を持ち上げて全体を示す) Et puis il faut lui refaire un chevalet. (楽器を裏返す)

1行目では、目の前に一つのchevilleをかざしつつ、失われていたchevillesについて、また3行目では現在も失われたままのchevaletに語っている。

11 これは、普段のSとLの間柄から生ずるかもしれないし、「対視聴者」というテレビの現場的構成から発するものかもしれない。

12 このvotreは「親近感を出すための2人称所有形容詞」であり、料理のレシピなどによく見られる。

②5) Mouiller avec un peu d'eau et une cuillere de jus de cuisson de votre agneau.

13 ここで、メンタル・スペース理論なら、この《votre》によって《vous》spaceが開かれており、その謂わば「視聴者スペース」において「指示的」なのだという議論が可能かも知れない。だが、その場合においても「現場指示」ではないのである。

14 筆者の提唱してきた《動的認識構造》によれば、 $\phi N \rightarrow un N \rightarrow le N$ という過程をたどるため、le Nは(un Nでさえも)直接指示対象を指すことはない(cf. 福島1990, 1991)。

15 むしろ「非指示的」である可能性の方が高い。

16 このような「コミュニケーション・モデル」にかんしては、福島(1997)参照。

17 この考え方は、les Nは「内包指示」とするFURUKAWA (1997)の考えと、基本的に共通するものである。しかしながら、「内包」を「語彙的意味」(sens lexical)であるとするならば(FURUKAWA & NAGANUMA, à paraître), 筆者の考え方とは異なることになる。

【参考文献】

朝倉 季雄 (1967) : 『フランス文法覚え書』白水社。

池田 清彦 (1995) : 「名辞」その指示対象・使い方・同一性, 『現代思想』23-4, 青土社: 296-302.

今井むつみ (1997) : 『ことばの学習のパラドックス』認知科学モノグラフ5, 共立出版。

井元 秀剛 (1995) : 役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み, 『言語文化研究』21, 大阪大学言語文化学部: 97-118.

上野 直樹 (1996) : 状況的認知とギブソン, 『言語』25-1~3,6, 大修館書店。

上野 直樹 (1998) : 見ることのデザイン——知覚の社会—道具的組織化, 山田富秋・好井裕明 編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房:204-

223.

- 木村 大治 (1997) : 相互行為における「打ち切りのストラテジー」, 谷泰 編『コミュニケーションの自然誌』新曜社:414-444.
- 金水 敏 (1990) : 指示詞と談話の構造, 『言語』19-4, 大修館書店 : 60-67.
- 串田 秀也 (1997a) : 会話のトピックはいかに作られていくか, 谷泰 編『コミュニケーションの自然誌』新曜社 : 173-212.
- 串田 秀也 (1997b) : ユニゾンにおける伝達と交感, 谷泰 編『コミュニケーションの自然誌』新曜社 : 249-294.
- 坂原 茂 (1990a) : 同定文・記述文とフランス語のコピュラ文, 『フランス語学研究』24, 日本フランス語学会 : 1-13.
- 坂原 茂 (1990b) : 役割, ガ・ハ, ウナギ文, 『認知科学の発展』3, 講談社 : 29-66.
- 坂原 茂 (1996) : 英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係, 『認知科学』3-3, 日本認知科学会 : 38-58.
- 菅原 和孝 (1997a) : 会話における連関性の分岐——民族誌と相互行為理論のはざままで——, 谷泰 編『コミュニケーションの自然誌』新曜社:213-246.
- 菅原 和孝 (1997b) : 言語の身体モデルを求めて, 『言語』26-7, 大修館書店:20-27.
- 田窪 行則・金水 敏 (1996a) : 対話と共有知識——談話管理理論の立場から, 『言語』25-1, 大修館書店 : 30-39.
- 田窪 行則・金水 敏 (1996b) : 複数の心的領域による談話管理 『認知科学』3-3, 日本認知科学会 : 59-74.
- 谷 泰 (1997) : だがそれはしかじかであることを知らない, 谷泰 編『コミュニケーションの自然誌』新曜社:85-129.
- 田中 茂範 (1997) : 「意味の使用説」の再考, 『言語』26-10, 大修館書店 : 22-29.
- 田中 茂範・深谷 昌弘(1998) : 『〈意味づけ論〉の展開』紀伊國屋書店.
- 東郷 雄二 (1998a) : フランス語の話し言葉の特徴——談話方略を中心に——, 『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』平成7~9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書.
- 東郷 雄二 (1998b) : 談話モデルと指示, 『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』平成7~9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書.
- 東郷 雄二 (1998c) : 談話モデルと指示——指示対象はいかに確立されるか——, 日本フランス語学会第170回例会口頭発表ハンドアウト.

- 東郷 雄二 (1999) : 談話モデルと指示——談話における指示対象の確立と同定をめぐって——, [Online Available 1999/09/06], [http://lapin. i.c.h.kyoto-u.ac.jp/disc.model.html](http://lapin.i.c.h.kyoto-u.ac.jp/disc.model.html)
- 西阪 仰 (1995) : 関連性理論の限界, 『言語』 24-4, 大修館書店:64-71.
- 西阪 仰 (1996) : 対話の社会組織, 『言語』 25-1, 大修館書店:40-47.
- 西阪 仰 (1997a) : 『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』 認識と文化13, 金子書房.
- 西阪 仰 (1997b) : 間身体的関係のなかの対象, 茂呂雄二 編『対話と知』新曜社 : 79-100.
- 西阪 仰 (1998) : 概念分析とエスノメソドロジー—「記憶」の用法, 山田富秋・好井裕明 編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房 : 204-223.
- 野家 啓一 (1996) : 『言語行為の現象学』勁草書房.
- 野本 和幸 (1997a) : 『意味と世界』法政大学出版局.
- 野本 和幸 (1997b) : 意味はどこにあるのか——現代の論理的意味論マップ, 『言語』 26-10, 大修館書店 : 30-37.
- 深谷 昌弘・田中 茂範 (1996) : 『コトバの〈意味づけ論〉』紀伊國屋書店.
- 福島 祥行 (1990) : 動的認識構造と文法システム, 『Lutèce』 20, 大阪市立大学フランス文学会 : 1-24.
- 福島 祥行 (1991) : 冠詞システムの研究, 『Lutèce』 21, 大阪市立大学フランス文学会 : 1-22.
- 福島 祥行 (1993) : 不定名詞句のen化と否定——不定名詞句システムの認識構造——『TLLMF』 4, 大阪市立大学大学院文学研究科森本研究室 : 39-48
- 福島 祥行 (1995) : 冠詞・記憶・時間——メモリ・システムと認識構造, 『人文研究』 47-2, 大阪市立大学文学部 : 19-36.
- 福島 祥行 (1997) : 認識・文化・コミュニケーション——認識コミュニケーション論・試論——, 『人文研究』 49-9, 大阪市立大学文学部 : 1-33.
- 福島 祥行 (1998) : 意味・概念・役割——定冠詞名詞句の指示対象と認識構造——, 『人文研究』 50-5, 大阪市立大学文学部 : 29-52.
- 松原 秀治 (1978) : 『フランス語の冠詞』白水社.
- 三藤 博 (1999) : 談話の意味表示, 『談話と文脈』岩波講座言語の科学7, 岩波書店 : 55-91.

- 山鳥 重 (1998) : 『ヒトはなぜことばを使えるか』 講談社現代新書1427, 講談社.
- 鷲尾 猛 (1960) : 『フランス語 冠詞の話』 大学書林.
- COULTER, Jeff (1979) : 『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』 [西阪仰] 新曜社, 1998.
- FAUCONNIER, Gilles (1994) : *Mental Spaces*, Cambridge University Press.
[『メンタル・スペース』新版 [坂原・水光・田窪・三藤] 白水社, 1996]
- FURUKAWA, Naoyo (1997) : *Les Glaneuses de Millet : emploi intensionnel de LE(S)*, in *Revue de Sémantique et Pragmatique* : 169-181.
- FURUKAWA, Naoyo & NAGANUMA Keiichi (à paraître) : À propos de l'emploi «quasi-intensionnel» de l'article défini : *la copie du dessin et a copy of drawing*, in *Les Actes du XXII^e congrès international de linguistique et philologie*.
- GUILLAUME, Gustave (1919) : *Le Problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Nizet/Univ. Laval, 1975.
- MARTIN, Robert (1986) : Les Usages générique de l'article et la pluralité, in *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Recherches linguistiques XI, Klincksieck : 187-202.
- MERLEAU-PONTY, Maurice (1945) : *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1976.
- SPERBER, Dann & WILSON, David (1981) : 『関連性理論——伝達と認知』 [内田・中達・宋・田中] 研究社出版, 1993.
- WITTGENSTEIN, Ludwig (1953) : 『哲学探究』 ウィトゲンシュタイン全集8 [藤本隆志], 大修館書店, 1976.

【コーパスA】

Trucs: Bouton et allumette (1991, 92?) CIRNEA [PICS The University of Iowa]

L : Laura Fronty

S : Sophie (animatrice)

1. L : (咳) Bonjour Sophie
2. S : (近付いて来つつ) Alors ce matin =
3. L : = (Sを見て) Je suis en train de me battre avec un bouton et une

allumette.

4. S : Voila Parce qu'alors Laura, (Lの隣に坐って) elle coud son bouton
5. L : (カメラの方を見る) (Sを見) (カメラ向き)
6. S : (Lの手元を見て) avec une (Lの顔を見る) allumette. =
7. L : = Et en fait c'est pas moi qui couds ce, mon bouton avec une allumette, c'est une amie 「qui a l'habitude
8. S : 「Votre grand-mère
9. L : Non non
10. S : Ah
11. L : Ça c'est une amie qui a, de surcroît n'est pas (Sを見て) une vieille dame (笑) .. (正面を向き) m'a donné ce truc pour coudre les boutons. (Sを見て) Moi je suis 「pas une couturière vraiment affirmée, (正面を向き) et
12. S 「Hmm
13. L : je reconnais qu'à la maison en plus je,. quand (Sを見て) les enfants, euh, perdent leurs boutons je leur dis : «Tu les couds toi-même parce que plus tard tu les coudras tout seul, donc c'est pas à moi de les recoudre.» = (正面を向くが, 次のSの動作で再びSを見る)
14. S : (乗り出して) = Mais je suis rassurée parce que (ペンでLの手元の針をさし) j'aperçois quand même une (Lの顔を見る) aiguille. = (カメラ目線)
15. L : = Il 「y a quand même, il y a quand même ... attendez.
16. S : 「Ça ne veut pas dire que vous ... vous cousez avec l'allumette.
17. L : L'allumette 「n'est pas faite pour coudre directement
18. S : 「(笑)
19. L : 「le bouton.
20. S : 「Ah, d'accord. D'accord.
21. L : (カメラ目線) Elle me sert simplement, parce que toutes les bonnes couturières le savent, il faut laisser un petit peu (Sを見て) de jeu entre (指さし) le bouton et (指さし) le tissu, parce que (布を指さし) si vous ne laissez pas de 「jeu,
22. S : 「Hmm.
23. L : (ボタンを引っ張る仕草) vous arrachez le tissu. (ボタンを見て, マッ

- チ棒を掴み) Donc, le truc est tout bête, vous glissez une allumette entre le bouton et le tissu.
24. S : Hmm.
25. L : Voilà. (針を引っ張りつつ) Et au lieu de coudre direc-, vot-, d'abord deux petits points pour fixer le bouton, (ボタンの下に針を差し込みつつ) et ensuite vous mettez simplement votre fil autour de l'allumette et vous (再び針を差し込みつつ) 「repassez dans le bouton ...」
26. S : 「Donc vous cousez l'allumette avec. =」
27. L : = Voilà. Comme ça. (再び針をボタンの穴に通して) ... Je repasse.
28. S : 「Voilà.
29. L : 「Pour une fois (針を通す) ça se passe à peu près bien. (笑) .」
30. S : Attendez. Pour une fois, Mesdames et Messieurs enfin un truc réussi. (笑)
31. L : Et voilà. Et ensuite (マッチの軸を引き抜きつつ) on retire l'allumette... (笑)
32. S : (Lの手元を覗き込んで) (笑)
33. スタジオの声 : [?]
34. L : Non ! Non ! (笑)
35. スタジオの声 : (笑)
36. L : Et (針を通す) on repasse le fil, Hop ! Attendez. 「Voilà.
37. S : 「Alors, la voilà.
38. L : Et puis la, les couturières, on fais comme 「ça. (糸をボタンの根本にぐるぐる巻き付け)
39. S : 「Hmm.
40. L : (Sの方を向き) Et on stoppe et on a suffisamment de jeu avec le bouton. (正面向き) On ne déchire pas le tissu. (Sの方を向き) C'est réussi. C'est parfait. =
41. S : = (ペンでLの手元を指し) Et le tissu, vous arrivez à bien le tirer après. Il y a pas de problème ? =
42. L : (手元を見て) = Oui, oui. Non, non, non. C'est bon. (ボタンを持ってみせる) (笑)
43. S : C'est bon.
44. L : (笑いながら) (正面向いて) Voilà.

45. S : Merci Laura pour ce truc absolument indispensable. (Lの手元を見つつ) 「Ça me paraît très bien. (自分の手元の進行表をめくってみる)
46. L : 「Et il paraît ... mais il paraît que toutes les couturières font ça avec (Sを見る) une allumette. Voilà (笑)
47. S : Merci. (笑)

【コーパスB】

Un Paris à découvrir (1990) CIRNEA [PICS The University of Iowa]

A : アラブ系留学生

B : 楽器店の女性店主

C : アジア系留学生

1. A : (店に這入って) Bonjour, Madame.
2. B : Bonjour.
3. A : (棚の楽器を指さし) Je voudrais voir ça, s'il vous plaît.
4. B : Oui. (持っていた楽器を置き, 示された楽器を出す) Vous savez ce que c'est ?
5. A : Non.
6. B : (Aに) Oui, c'est une vielle à roue. C'est un instrument du centre de la France. /
7. A : Hmm.
8. B : (Aに) Vous savez comment ça fonctionne ?
9. A : Non.
10. C : (首を振る)
11. B : Non. Le principe, (蓋を開けて示しながら) ce sont des cordes qui passent sur une roue.
12. A : Hmm.
13. B : Voilà. On tourne la roue...
14. A : Hmm.
15. B : Et pour avoir une sonorité, on actionne un clavier. (鍵盤を押してみせる) Comme ça. Et les touches retombent automatiquement, parce qu'on tient la vielle, face à soi, (蓋を開けて) comme ça. Voilà .

16. C : C'est tout ?
17. B : Le principe ? Oui, c'est tout. (笑)
18. C : (笑)
19. A : C'est à peu près qu'en France ? Ou non ?
20. B : (取っ手を廻しながら) Centre de la France, Berry, Auvergne, Limousin. Mais il en existe aussi dans les pays de l'est,
21. C : 「Hmm.
22. B : 「de ces instruments. (廻し終える)
23. C : Je voudrais, euh, plusieurs miniatures, comme souvenir de mon séjour à Paris. Euh...
24. B : Oui. (笑)
25. C : (笑) Je ne peux pas jouer. =
26. B : = Vous pouvez pas emmener une vielle entière, euh, chez vous ?
27. C : (笑) Non. =
28. B : = Non, c'est trop grand.
29. C : (笑) Oui, mais, ça ne m'intéresse pas. (笑)
30. B : (笑) D'accord.
31. B : Si vous voulez, je peux vous montrer un instrument qui est en restauration dans l'atelier.
32. C : (項突く)
33. A : Oui.
34. B : Je ne fais jamais rentrer personne, mais puisque vous venez d'loin .. de loin. (笑) Allons-y.
35. A : Merci.
36. B : (作業机の前。机上には修理中の楽器) Alors c'est un tar iranien (糸巻きを紙鍵で磨く), euh, qui n'avait plus de ... (指で楽器の胴をコンコンと叩く) dont la peau était crevée,
37. C : Hmm.
38. B : qui n'avait plus de ... (竿の部分をなぞりつつ) de fretage boyau,
39. C : Hmm.
40. B : (指で弦を押さえる様子を示しながら) qui sert à, en fait, délimiter évidemment les différents octaves. /
41. C : Hmm.

42. B : Et puis, euh, actuellement, il y a (手にしていた糸巻きを眺め) - il lui manquait des chevilles aussi (元の場所に差し込もうとして, 再び顔の前に持ってきて示し) ,
43. C : Hmm.
44. B : que j'ai retournées et refaites, (糸巻きを差し込む) pour pouvoir accrocher les cordes. (楽器を持ち上げて全体を示す) Et puis il faut lui refaire un chevalet. (楽器を裏返す)
45. C : Hmm. C'est très joli. (楽器の胴に触れる)
46. B : (笑) (Aの方を見て) Il y a le même chez vous, je crois ?
47. A : Non chez =
48. B = (楽器に向き直りつつ) Pas tout à fait ?
49. A : Non chez nous, il y a le .. comment il s'appelle, le oud, en arabe.
50. B : (楽器の方を向いたまま) Ah, les ouds, oui. (楽器の埃を払うように)
51. C : Le quoi ?
52. B : (Cの方を見る)
53. A : Le oud.
54. C : Le oud ?
55. A : Le oud. (右手で弦をかき鳴らす仕草)
56. B : (楽器に顔を戻しつつ) C'est [sɛt] ... oui chez vous, c'est un luth, en fait (楽器の埃を払うように) , alors que ça c'est ... c'est ... c'est de la famille du luth, mais, (Cの方に顔を上げ) euh,
57. C : Hmm.
58. B : (楽器の表を向けつつ, Bの方を見て) avec un grand manche, (楽器の方に向き直り) par contre. =
59. A : = Dans tous les pays arabes,
60. B : Oui. (項突く)
61. A : c'est le ... égyptien,
62. C : Hmm.
63. A : syrien.
64. B : (楽器を再び裏返す)
65. C : Hmm. \
66. B : (楽器を眺めつつ) Voilà, celui-ci est particulièrement joli, je trouve.